

1 好意的助言の言い方

日本に来ている英米人と話をしていると「～したほうがいいよ」とか「～しないほうがいいよ」とか言いたくなるのがたくさん出てくる。

なんと言っても相手は、外国人。日本の文化・習慣や、人々のものの考え方もよくわかっていなくて、カルチャーショックを受けていたりもするから、あなたは善意から、親切な助言をひと言ふた言述べたくなるのも当然であろう。

問題は、あなたの善意が、英語にしたときに善意として伝わらず、押し付けがましい圧力として脅迫的に響いたりしてしまう場合がある、ということである。それではあなたの好意は台無しである。あなたは決してそんな意図で発言したのではなかった。

そのような誤解を防ぐためには、何が必要なかを考えてみよう。

▶ 助言・勧告は助動詞で

「助言・勧告」を表すには、英語では助動詞を文の動詞の前に付ける：

S + 助動詞 + V + O (+ α)

という文型である。また、この場合の動詞は「原形」になることも案外、うっかりしがちなので、実際の会話では注意したい。

それでは例によって、まず問題を考えてもらうことから始めよう。

(1)

さて、あなたはイギリスから日本に初めて出張で来たばかりの友人に、東京都内を動き回するには、まずJR東日本のSUICA(スイカカード=プリペイドカード)を買って持っていたほうが便利だと助言する。次のどちらの言い方のほうが、あなたの意図に合致しているか？

- (1) You had better get a Suica Card first before you travel around Tokyo.
- (2) You should get a Suica Card first before you travel around Tokyo.

「都内を動き回る前にまずスイカを買っといたほうがいいですよ」というような日本語の意味をより正しく伝えるのは(1)か(2)か？

あなたが40歳以上の人であるとすると、おそらく学校時代に、

You had better + 動詞原形=～したほうがよい

と教わったと思う。だが、これは間違いである。

You had better get back home before dark. とか、
You had better eat the carrots and green peppers.

とかいう表現は、英米人は耳にたこができるほど聞かされてきている。幼少時に母親から。そう、これらの表現は**大人から子供への一方的な指図**であり、その指図を守らないと何らかの不利益が子供の上に降りかかってくることを暗示するもので